

令和4年度 南アルプス市立若草南小学校 後期自己評価書

南アルプス市立若草南小学校

校長 浅利 進

● 学校教育目標

「学びを深め、心豊かなたくましい子ども」

〔具体目標〕

- (1) 自ら学び、深く考える子ども (知)
- (2) 豊かな心で、思いやりのある子ども (徳)
- (3) 体をきたえ、最後までやりぬく子ども (体)

〔目指す学校像〕 笑顔あふれる学校
学び合い 高め合い 信頼し合う 地域と共にある学校

〔育てたい児童像〕 人の痛みがわかる思いやりのある児童
自分の考えをもち、チャレンジする児童
若南プライドをもち、ふるさとを愛する児童

〔若南プライド〕

地域の歴史・伝統・文化に気づき、自ら学び、体験する中で 地域に誇りを持ち、自尊心を高める
積極的な活動に取り組む精神・自他の尊重・多様性を認め合う精神

〔学校経営の重点〕

1 児童や地域の実態をふまえた適切な教育課程の編成と実施に努める。

- (1) 新学習指導要領の理念をふまえた児童や学校の実態に応じた教育課程の編成
- (2) 幼稚園・保育園・若草小学校・若草中学校との連携を考えた教育課程の編成
- (3) 各教科や道徳、総合的な学習の時間、学校行事を含めた特別活動などの横のつながりと異学年間の縦のつながりを考えた効果的な教育課程の編成
- (4) 全教育活動を通じた体系的なキャリア教育の推進
- (5) 学校内外の教育資源の活用と体験学習の充実

2 「自ら学び 深く考える子ども」の育成を図る。

- (1) 学習意欲の向上や基礎的・基本的事項の確実な定着を意識した授業づくり
(反復繰り返し学習、市単講師によるTTや少人数指導)
- (2) 学習スタンダードに基づいた授業を実践する。
(若南スタンダードの定着化、問題解決的な学習展開、見通しと「対話」のある授業づくり)
- (3) SDGSの視点を取り入れた学習活動
(自然環境、資源、貧困など地域、世界の諸活動について自ら課題として考える学習活動)
- (4) 思考力・判断力・表現力を高めるためのコミュニケーション能力の進展

- (ICTの利活用, 単元末評価問題の活用, 協働的学習体制の充実, 外国語教育の充実)
- (5) 組織的・計画的・継続的な校内研究の充実
(学級づくりと授業実践を中心とした校内研究の推進, 一校一実践・一人一実践の取組)
- (6) 家庭学習の習慣化とアウトメディアの取組
(家庭学習の手引きの活用, 家庭学習取組強化週間, 主体的に取り組む学びノートの活用)

3 「豊かな心で 思いやりのある子ども」の育成を図る。

- (1) 自分の大切さとともに他の人の大切さを認める人権教育の推進
(人権尊重の理念に基づく教育活動, 話の聞き方 認め合い名人・あいづち名人)
- (2) 全ての子の居場所のある居心地の良い学級経営の充実
(所属感, 自己有用感, 自己肯定感を持たせる取り組みの工夫, Q-Uの活用, 学校生活アンケートの活用, SOSの出し方に関する教育の実践)
- (3) 学校教育全体を通して道徳教育の充実 (考え議論する道徳の推進)
- (4) 児童会を中心とした仲間づくり・集団作り
(あいさつ運動, 縦割り班活動, ボランティア活動)
- (5) 読書活動・音楽活動の推進
(朝読書の効果的实施, 図書集会の活用, 読み聞かせの取組, 歌声タイム, 音楽会)
- (6) 集団生活のルールやマナーの徹底
(月ごとの生活目標, あいさつ運動, 無言清掃, 全校集会や全校放送の活用, 若南プライド「心のやりとりきちんとあいさつ・心に向ける返事・心をそろえるくつそろえ」)

4 「体をきたえ 最後までやりぬく子ども」の育成を図る。

- (1) 運動の日常化による基礎体力づくり
(体育的行事の計画的実施, 「健康・体力づくり一校一実践運動」の取組)
- (2) 粘り強く最後までやり抜く強い意志を育てる指導支援
(体育授業の充実, 粘り強さを大切にした学習指導の充実)
- (3) 基本的な生活習慣の確立と保健指導の充実, 給食指導を中心に食育の充実
(たよりや掲示物, 学級指導, 保健集会の活用, 給食週間の取組)

5 特別支援教育(特別支援学級・通級指導教室)の充実に努める。

- (1) 児童の実態に応じた特別支援学級の運営
- (2) 特別支援教育の視点を取り入れた学級経営
(特別支援学習会の実施, ユニバーサルデザインの活用)
- (3) 交流学級・在籍学級の担任, 保護者・関係諸機関との連携を活かした指導支援の充実
(機能的なケース会議開催, 外部の専門機関や関連行政機関との連携, 「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成と活用)
- (4) サポートルーム若草南のセンター的機能の充実
(校内外のニーズをもつ児童のアセスメント, 教育相談)

6 児童の安全・安心を守り, 家庭や地域に開かれた学校づくりを推進する。

- (1) 小中一貫校の取組推進
(若草中学校区小中3校との連携, 地域・地域人材の活用, 地域行事への参加・地域貢献)
- (2) 全教職員が「一致協力」, 連携・協働し支え合う教職員組織「チーム若南」

- (3) 自らの命は、自ら守る「危険回避能力」の育成
 (地震・火災想定避難訓練、不審者対応訓練、救命救急法訓練、引き渡し訓練
 交通安全教室・自転車教室の実施、防犯講話、危機管理マニュアルの充実と改善)
- (4) 学校評価や保護者アンケートを活かしたPDCAサイクルによる学校運営、教育方針の改善
 (自己評価・学校関係者評価の実施、児童・保護者アンケートの実施、行事ごとの教
 職員や保護者アンケートと総括の実施)
- (5) 授業参観、各種たより、HP、安心メールによる情報発信
 (学校開放日、授業参観、学校行事への参加等教育内容の積極的公開、学校通信・学
 年通信・学級通信・保健だより・図書だより・給食だより等の発行、HPでの情報
 発信や安心メールを使った緊急連絡の活用)
- (6) 学校評議員制度の効果的な活用とPTA や地域との連携協力
 (地域ボランティアの活用、学校評議員会の開催、PTA 専門部の活動)

【評価方法】

児童、教職員に対して、アンケート用紙により回答を得た。

質問に対しての回答選択肢は4段階になっている。

- A：そう思う
 B：ほぼそう思う
 C：あまりそう思わない
 D：そう思わない

の4段階で、このうちAとBは肯定的なプラス評価であり、CとDは否定的なマイナス評価である。AとBのどちらを選ぶか、CとDのどちらを選ぶかについては、回答者の判断材料の有無・回答時点の状況等が関係するため、A・B・C・Dを厳密に区別して集計することよりも、A・B合わせてのプラス傾向、C・D合わせてのマイナス傾向として集計する方が、全体的な傾向をつかみやすくなる。そこで、各項目の回答に占める「A・B」の割合、「C・D」の割合を求め、

- 「A・B」の割合が大きいほど肯定的評価（プラス評価）
 「C・D」の割合が大きいほど否定的評価（マイナス評価）

と判断をした。

1 第2回児童アンケート・保護者アンケートの考察

【児童アンケート】

1学期と比較し、差が見られた項目（3ポイント以上の差）

質問内容	1学期の肯定的な回答	2学期の肯定的な回答	差
1 学校は楽しいか	93.5%	96.9%	+3.4%
2 あいさつができる	92.4%	95.8%	+3.4%
6 発言や意見・質問を言うか	75.8%	70.4%	-5.4%
10 いじめや悪いことを先生 や友達に言えるか	89.6%	92.7%	+3.1%

児童アンケートの結果、他の項目はほぼ1学期と同様な数値であった。

全10の質問項目中、肯定的評価が90%以上の項目が7つ、80%以上の項目が2であり、全体的に肯定的評価が多い。児童の学校生活は概ね満足していると考えられる。前期と比較して、「学校は楽しい」「進んであいさつする」「授業がわかる」「いじめの防止」については肯定的評価が微増している。その反面、「授業中に発言や質問、意見を言う」が前期と比較して、肯定的な割合が減少している。これらを含め、考察を行うとともに、指導の改善を図っていきたい。

【保護者アンケート】

否定的な回答が多かった項目

質問内容	肯定的な回答	否定的な回答
3 あいさつをしている	81.4%	18.6%
4 家庭学習の習慣	74.1%	25.9%

保護者アンケートの結果は、10項目のうち9つの項目で肯定的な回答が80%を超えており、概ね満足できる結果であった。あいさつについては昨年度より3.8%下がっている。家庭学習の習慣については2.8%下がっている。否定的な回答が多かった2項目については、さらに連携をとり、家庭の協力を得ながら進めていきたい。

児童1の項目「学校は楽しいですか」・保護者1の項目「子どもは学校に行くのを楽しみにしている」について

「学校が楽しい」と感じている割合は、96.9%と肯定的な評価は高く、前期の93.5%よりも増えている。保護者のアンケートから90.7%が肯定的な回答であった。しかし、楽しいと思わない児童がいることについて、要因は何かを理解し、担任だけでなく組織的に働きかけ、適切な支援をしながら、家庭と連携を図り、児童が楽しいと思える学校生活を送ることができるよう改善を図りたい。

児童2の項目「あいさつがしっかりできている」、保護者3の項目「きちんとあいさつしている」について

児童アンケートでは95.8%の児童が、学校や地域においてあいさつをしていると回答し、1学期より若干数値が上がっている。地域や中学生と連携したあいさつ運動や児童会のあいさつ運動、職員のあいさつへの意識改革などでよい成果となって表れたのだろう。しかし、保護者アンケートでは81.4%が肯定的な回答であり、児童との結果に開きがあった。保護者は、家庭での児童のあいさつに対する物足りなさを感じていると思われる。「あいさつは家庭から」を実践していただき、「地域でもあいさつが響く学校」を目指し、保護者との連携やあいさつ運動への取り組みを続けていきたい。

児童4の項目「授業がわかりますか」、児童6の項目「授業中に質問または意見を言いますか」について

「学校の授業がわかる」ことは、学校生活を送る上で最も大切なことの一つである。児童の肯定的な回答は96.5%であり、前期の94.1%より肯定的になっている。今年度は教科担任制の推進を図りながら研修し、授業改善を行ってきた成果とも思われる。今後も否定的な回答をした3.5%の児童に対し、授業がわかり楽しいと感じられるように、基礎基本を大切にされた授業を展開していきたい。

「授業中に質問または意見を言いますか」に肯定的な回答は、70.4%であり、前期 75.8%と比較すると若干ポイントが低くなっている。「そう思う」の割合が 38.7%となり、質問項目の中で最も割合が低い。若草南小学校の児童の傾向としてここ 3 年程同様な割合となっている。意見を言うことだけが表現方法ではないことも児童理解の根底に置き、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を通して、教師・児童の意識を高めていきたい。

児童 7 の項目「家庭で宿題や自主学習を自分から進んでしていますか」

保護者 4 の項目「家庭学習の習慣が身についている」について

児童の肯定的な回答は、後期 85.4%，前期 84.5%（昨年度 81%）であり、家庭学習や自主学習への意識が高くなっていると考えられる。家庭学習の方法や学びノートの内容などがお便りで紹介され、家庭学習見守り週間や自主学習への励ましの成果が徐々に表れていると言える。しかし、保護者アンケートでは 77.0%となっている。家庭学習は保護者にとって大きな課題となっていることがわかる。学力向上と家庭での学習の時間には相関関係があると言われている。家庭でも学習時間の確保が習慣化され、自ら学ぶ姿が見られるように、今後も保護者の協力を仰ぎながら、日頃の取組が継続できるよう、粘り強く進めていきたい。

児童 10 の項目「いじめや悪いことをしている人を見たら、先生や友達に言えますか」について

肯定的評価は 92.7%と前期より 3.1%高くなった。1 学期に「困っている時に相談できるような人間関係づくり、雰囲気作りに努めていく。」という重点目標を立てて取り組んできた成果が表れている。児童に相談できる人がいることはとても大切である。保護者、教職員、友達など誰にも相談できない児童がいることのないように、一人ひとりの児童にしっかりと目を配り、児童が孤立しないように保護者と連携しながら、必要な支援・指導を心がけていきたい。

2 第 2 回職員アンケートの考察

【全体的な傾向】

教職員自己評価の結果は、すべての質問項目において肯定的回答が多数を占め、学校長の指導の下、学校教育目標達成のために全職員が協力して努力していることがわかる。

前期の反省を生かし、職員の意識改革と実践がより高くなっている項目は、「子どもたちが、楽しく学校生活を送れるよう努めている。」「子どもに基礎的な学力が身に付く指導を行っている。」「生徒指導について、組織的かつ迅速に対応している。」「学校行事は職員の共通理解のもと、子どもたちが楽しく参加できるように計画されている。」「校内研究に主体的に参加し、授業力の向上に努めている。」である。

反対に、改善していく項目は「緊急時の対応について共通理解が図られ、計画的に訓練が行われている。」「授業に集中させるための指導（聞く態度）に努めている。」「家庭学習を定着させるために工夫している。」であると考えられる。

「そう思う」と肯定的に回答している項目は、我々の強みとして、継続して取り組んでいくとともに、弱み・改善していく必要のある項目については具体的な方策を立てて取り組んでいきたい。

I 学校生活について

「子どもたちが、楽しく学校生活を送れるように努めている」については、「そう思う」の割合が高く、教職員の意識も高いことがわかる。子どもたちが、学校は楽しいと思い、通学することは学校・保護者・地域の共通の願いである。

「すすんであいさつをする指導の充実」については、「あいさつは児童理解の一步である」という観点から、教職員の意識を高め、人間関係の形成を図れるように「あいさつ＋一声」を実践してきた。児童・教職員ともに「そう思う」が増えていることは取組の成果と考えられる。今後も、「気持ちの良いあいさつ」が「誰とでもできる」児童の育成に取り組んでいきたい。

II 学習指導について

「児童を授業に集中させるための指導」では、「そう思う」の割合が44.4%であった。集中できる授業、質の高い授業の実施を目指し、教職員の意識・資質を高めていきたい。校内OJTでは、若手育成のための授業参観と意見交換が計画的に行われており、本校の特色の一つになっている。

わかりやすい授業の展開と児童の学力向上は、学校に課せられた最も大切な課題の一つである。「学校の授業がわかりますか」について否定的な回答をした3.5%の児童にしっかりと目を向け、「基礎的な学力の定着」を意識し、学習の振り返りや個別指導をふまえた取組について校内で共通理解を図り、一人一人の授業改善を進めていきたい。一人一台PCの活用は、児童の意欲向上、個のニーズに合った学びにつながっている。

III 家庭学習について

「家庭学習を定着させるための工夫」では、マイナス評価はなかった。家庭学習強化週間の取り組みでは、自分のめあてと保護者の励ましの言葉などの記入欄を工夫して2年目となる。学級・学年だより等で、学びノートや家庭学習見守り週間のことを取り上げ、保護者へ周知することも行ってきた。このようにお互いのノートを見せ合う、掲示する、学級通信等で紹介するといったことで、児童の意欲の向上、より良い学習につながっていくと思われる。

家庭学習は、保護者の協力が必要不可欠である。全校での取り組みや学年・学級での取り組みをさらに進め、家庭学習の定着を図っていきたい。

IV 生徒指導について

一人一人が自己肯定感、自己有用感を感じられる居心地の良い学級づくりが、楽しい学校生活の基盤となり、学習活動を支える基盤となる。様々な児童がいる中で学級経営をしていくことは大変であるが、お互いの良いところを認め合う活動をたくさん仕組み、一人一人が大切にされていると実感できる居心地の良い学級をめざしてきた。

生徒指導の面から、校長を中心とし組織的に対応してきた。また、保護者と連携を図って取り組み、対応できたことも効果的な指導につながった。これからも、不登校やいじめ等につながる兆候の早期発見と早期対応に努めるとともに、報告・連絡・相談を密に行い、管理職・生指担当・養護教諭・コーディネーター等を中心とし、組織的に対応していきたい。

V 学校経営について

校務分掌については、なるべく主・副と複数で運営するようにしながら、若手や中堅教諭が連携して推進できるように配慮された。刻々と変化する新型コロナウイルス感染症対策の対応や、元に戻ろうとする事業・研修、それに伴う調査等に追われることも多く、1学期の教育活動をふり返ってみると、分掌によって負担の差が生じたように感じたり、多忙化を解消することが大変だったりしたと思う。

ICT関連での専門部を組織し、日常的に情報発信したり、研究の中で共有化したりすることにより、本校のGIGAスクールに対する取組は、概ね満足できる内容であったと思う。校務支援の導入・切替については、校内での情報共有や他校との情報交換を図りながら、進めることができた。

これからも、縦と横の連携を十分に図り、若草南小児童の健全育成のために、一致団結して教育活動に取り組んでいきたい。

VI 学校行事について

新型コロナウイルス感染症対策のため、多くの行事について、昨年度の経験を生かし、また、状況に応じた判断をする中で、共通理解を図っている。「子どもたちが楽しく参加できるように計画されている」という面においては、できる範囲で工夫されていると思われる。

行事にかかわらず、様々な場面における児童指導も、保護者・地域に発信し理解してもらうことも順調に進めることができたと思う。今後も目的をしっかりと見据え、児童の安心安全を第一に考え、無理のない計画の中で取り組んでいきたい。

VII 校内研究、特別支援教育について

校内研究では、県から「教科担任制推進事業」指定を受け、これまでのICT教育を進めながら、「協働的な学び」を目指した研究を行ってきた。校内研究会は、「協働的な学び」を授業に取り入れるにはどんな内容が良いか吟味し、工夫し、学び合う雰囲気のもと、熱心に行うことができた。「教科担任制」については、兵庫県の先進校の様子をリモートで学ぶことができた。若草地区小中学校でも情報交換や互いに授業を見合う中で、研究を続けている。今後は、学校評価の結果も含めて今年度の研究仮説を検証し、来年度につなげていきたい。

特別支援教育については、特別な配慮が必要な児童が多く、担任の負担が大きい。しかし、交流学級、支援学級、養護教諭、教務の教職員が連携して力を発揮している。児童の様子で対応がさらに求められる場合もあり、組織的な対応が必要不可欠である。

VIII 施設・設備・安全管理について

南アルプス署、交通指導員の方々のご協力のもと、1年生の交通安全教室、3年生の自転車教室が実施できたこと、防犯教室や避難訓練も方法を工夫しながら実施できたことは良かった。教育ボランティアの方々には、交通安全の看板を作成していただき、校外に設置することができた。これを見て、交通安全に取り組んでもらえる期待も大きい。

3年ぶりの水泳指導をいきいき水泳事業として講師と連携しながら、各学年とも、水慣れ・水泳指導が実施できたことは大変良かった。

洪水避難地域に指定されているので、垂直避難訓練も実施した。高学年児童には、ハザードマップを配付し、地域の洪水の様子を理解してもらうこともできた。コロナ過と天候不順で保護者によ

る引き取り訓練は実施できなかった。今後も、定期的な訓練や安全教育を通し、日頃から防犯・防災の意識を高める指導にあたりたい。また、保護者や地域住民の協力も欠かせない。通学路については、地域・見守り隊の方々の献身的な働きかけで、浅原地区、藤田地区において改善が図られている。本当に感謝したい。今後も見守りたすきの普及や小中連携なども含めて、地域で児童を見守る学校づくりを進めていきたい。

IX 学校と家庭との連携についての質問

学校と保護者が共通理解を図り、同じ歩調で進むことが望まれる。PTA総会や学年部会が紙上提案となったが、混乱もなく、ご理解していただいたものと評価できる。その背景には、保護者と教職員の連絡・連携が密に行われ、信頼関係を築くことができたことがあげられる。4月から5月にかけて、授業参観や家庭訪問が実施できたことも、学校と児童と保護者をつなぐ機会としてとても良かったと思う。

運動会は、児童の活躍する場面を保護者の方々に参観していただくことができた。「子ども達の様子を見ることができ、うれしかった。」など多くの感想をお寄せいただき、とても励みになった。コロナ禍での運動会の様式にもご理解とご協力をいただき、ありがたい。

3 まとめ

アンケート調査の結果を見ると、児童・教職員とも、すべての項目でプラス評価がマイナス評価を上回っている。日常行われている教育活動を継続していくことが大切であるといえる。

しかし、マイナス評価が大きい割合になっているいくつかの項目や、日ごろの教育活動から感じられる課題点も明らかになった。それらをまとめると、次のようなことになる。

【学校生活について】

- 「学校が楽しい」に否定的な回答をした児童にしっかりと目を向け、思いを聞き、課題となっていることは何かを把握して、児童一人ひとりにしっかりと対応していく。また、家庭と連携を取り、相談ができるようにしていただくとともに、学校でも「困ったときに誰かに相談していいよ」というメッセージを送りながら、全職員で共通理解を図り、指導にあたりたい。
- あいさつを心の交流の第一歩として、「あいさつ＋一言」など、教職員・児童会を中心に継続してあいさつをしていく。また、冬季休業中は児童会のあいさつカードの取組を行い、家庭・地域でのあいさつを広げられるようにする。

【学習について】

- 2学期以降は、教育課程および学習内容と時数を再確認し、基礎基本の定着を図ることを主眼に置いた学習活動の工夫ができるよう意識して取り組んだ。また、タブレット端末を有効活用しながら、どの学年も個に応じたドリル学習を進めることができた。課題となっている「発言または意見」を発表することと合わせて、友だちの意見にうなずき、しっかりと聞くこと、協働的な学び、質の高い学び合いにつながっていくようにすることに今後も取り組んでいく。これらのことは学力を向上させる上でも大切なことである。

- 学習内容の定着や学力の向上において、家庭学習は大切な役割がある。現状、家庭学習の取組状況には個人差が大きい。日々の取組や、家庭学習の内容や方法を工夫し、家庭学習を充実させていきたい。また、学校の取組だけではなく、保護者の理解を深め、今まで以上に協力を求めていきたい。
- 特別支援学級の児童について、交流学級とより連携を図りながら、個別のニーズに合った指導をしていく。今後もケース会議等を開催し、共通理解を図りながら進めていく。

【生徒指導について】

- 学年や教務、保護者、必要に応じて関係機関と連携を図って取り組むことを大事にしていきたい。組織的・継続的な取り組みが諸問題の解決につながっていく。学校のきまりや約束を守ることの指導は、いじめや非行行動に対する未然防止につながっていくと考える。児童会や学級会のきまりなど、児童は学校生活の中で様々なきまりを守りながら社会性を身につけていく。すべての教育活動を通して、困ったときには誰かに相談すること、きまりや約束を守ることの大切さについてより一層重点をおき指導にあたりたい。また学校では、いじめは絶対に許さないという毅然とした態度で教育活動を進めていきたい。

以上のような課題から、今後若草南小学校で取り組む重点項目を次のようにまとめた。

○『あいさつの響き合う学校づくり』『居心地のよい学級・学校づくり』を進める。

- ・「誰とでもあいさつ」「気持ちの良いあいさつ」をめざす。教職員は「あいさつ+一言（先にあいさつしてくれてありがとう。気持ちいいあいさつだね。先に〇〇さん、おはよう）を実践する。」
- ・お互いの良さを認め合う活動を取り入れて、居心地の良い学級づくりに力を入れる。
- ・支援が必要とされる児童にしっかりと目を向け、認め、励ましながら自信をもたせるとともに、自身の活動の振り返りを行い、次の行動に移せるように指導をしていく。

○『学力向上』に努める。

- ・基礎基本の定着を図り、「わかる授業」を進めていく。
- ・授業の中で、よく聞き、よく考え、発言する活動を今まで以上に取り入れていく。
- ・チームティーチング（複数教職員による授業）や授業改善を充実させていく。
- ・「家庭学習」のさらなる充実、家庭との連携を図る。

○自他の尊重、思いやりのある児童の育成

- ・児童アンケートやQU検査での結果を分析し、支援の必要な児童にはすぐに対応していく。
- ・子どもたちに寄り添い、良さを認め伸ばしていく。学年末に向け、教師と子ども、子ども同士の関係づくりをより一層進める。
- ・互いの良さを認め合い、いじめのない、安心できる学級づくりの取り組みを行う。